

「地域住民」を対象としたオーラル・ヒストリー手法に関する調査研究 ー瀬戸内・弓削町の女性グループを事例としてー

日本大学理工学研究科研究生 正会員 ○堀川 洋子
日本大学理工学部社会交通工学科 正会員 伊東 孝

1. はじめに

「オーラル・ヒストリー」(OH)とは、「インタビュー」「聞き書き」と同じようなものだが、これをより洗練された形で、目的意識をもって開発したのが、OH手法といえる。アメリカのOHA (Oral History Association)ではOHのマニュアルを作成している。

(社)土木学会土木史研究委員会オーラル・ヒストリー研究小委員会(委員長:伊東孝)では、2001年から、土木史研究に資することを目的として、戦後を代表する土木技術者を対象とした、OHインタビューをおこなっている。

しかし「土木」にとっては、「地域住民」の口述記録もまた大切である。そこで本研究では、瀬戸内・弓削町の女性グループを事例として、土木学会とは違う、「地域住民」を対象としたOH手法に関する検討をおこなう。

なお「インタビュー」と「ヒアリング」は混同されやすい表現であるが、「インタビュー」には「面談する」、「ヒアリング」には「聴聞する」といった意味合いがある(『広辞苑』等参照)。本研究では、調査目的にかなう表現として、「インタビュー」を用いている。

2. 土木学会のオーラル・ヒストリーとの相違

愛媛県旧弓削町(2004.10より上島町)は、瀬戸内海の弓削島、佐島、豊島、百貫島の4島からなり、総面積11.76km²、人口3,858人(平成12年度)である。

本研究のきっかけは、広島県鞆の浦の松居秀子氏(特定非営利活動法人鞆まちづくり工房代表)から「4000人程度の弓削町でなぜ10グループ以上のグループ活動が活発なのか」「なぜ女性グループが活発なのか」を調べてくれないかと、話をもちかけられたことにはじまる。

われわれ都市環境計画研究室では、夏のゼミ合宿で、弓削町の女性グループを対象としたOHインタビューをおこなうことになった。

本研究と土木学会のOHインタビューとの相違は次のとおりである。

①インタビューイ(話し手)が、土木学会では「公人」(公職にある人)であるのに対し、本研究は「地域住民」であること。

②インタビューア(聞き手)が、土木学会では「専門家」であるのに対し、本研究は「初心者の学生」であること。

3. オーラル・ヒストリー・インタビュー手法

以下、今回おこなったOHインタビュー・フローに沿って、概説する。

a) インタビューイとの事前交渉(4月～6月)

広島県鞆の浦の松居秀子さんと伊東が、愛媛県弓削町企画情報課長に、弓削町女性グループへのインタビューの申し入れおよび協力を依頼して、快諾を得た。

都市環境計画研究室の夏のゼミ合宿で、OHインタビューをおこなうことになった。

b) グループ編成(7月上旬)

OHインタビューの実施は、研究室のゼミ1(学部3年生)を主体とし、大学院生とゼミ2(学部4年生)でフォローするという体制をとった。

弓削町とのやりとりは、弓削町企画情報課長と相談しながらおこなった。行政と協力体制をとることで調査をスムーズにおこなうことができた。

c) 事前調査(7月中旬～8月上旬)

インターネットなどをもとに、人口や島の概要などを整理した(ゼミ1担当)。

d) 質問項目の作成および送付(7月中旬～7月下旬:インタビュー2～3週間前)

質問票は、企画情報課長・グループリーダー・グループメンバー対象の3種類を作成した。

質問項目は、ゼミ1が各自2～3問の質問項目を考えKJ法で整理したものを、伊東、堀川が検討した。松居さんにも質問を加えてもらった。

作成した質問項目は、企画情報課長に事前送付して確認してもらった。ほかの女性達には事前送付をおこなわ

キーワード:オーラル・ヒストリー, 地域住民, 弓削, 瀬戸内, 女性グループ

連絡先:〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1, TEL:047-469-5572, e-mail:yoko_horikawa@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

なかった。

e) 現地調査（8月8日：インタビュー前日）

インタビュー前日、「弓削島まちあるきの栞」（ゼミ1・ゼミ2作成）、『愛媛温故紀行』（近代化遺産調査報告書）、「ゆげ見て歩きマップ」（弓削町女性塾制作）などを参考にしながら、車班と自転車班にわかれて、まちあるきをおこなった。それぞれ、弓削町女性塾の方に案内していただいた。

インタビュー前の現地調査は、インタビュー内容を深めるため、また地域住民と信頼関係を深めるため、重要であるとする。

f) インタビュー（8月9日：インタビュー1日目）

インタビュー会場（福祉センター）の手配や女性達への連絡は、企画情報課長にいただいた。

インタビューは2日間実施し、1日目の午前中に企画情報課長（メイン・インタビュアーは伊東担当）、その後、女性達を対象に実施した。グループ総数は12グループで、1グループあたり2～3時間、基本的に別部屋でおこなった。1グループあたり女性1～4名が出席、それぞれ研究室メンバー（ゼミ生、院生、堀川）が約2～3人で対応した。少人数にわかれておこなうことにより、インタビュー内容が密になり、女性達も話しやすかったと思われる。

質問は「おもしろかったこと」「苦労したこととその解決策」「弓削町で誇りに思うこと」を軸として、女性達の経験をひきだすよう配慮した。インタビューの回答は、女性達の生活環境に密接に関連していることが少なくないので、幅広いインタビューをおこなうよう心がけた。

OHインタビューでは、一般的にお酒や食事等をださないことがコツとされている。本研究でも麦茶、お茶菓子は千葉産ピーナッツとした。

g) 報告・反省会（インタビュー1日目の夜）

インタビュー1日目の夜、研究室メンバー（ゼミ1、ゼミ2、院生、堀川、伊東）で反省会をおこない、成果や課題などが話し合われた。一つの班から、録音機器（ICレコーダー）のトラブルがあったが、速記メモをとっていたので困らなかったという話題がだされた。地域住民OHでは、速記者を依頼せず、録音自体も拒否される場合がある。上手な速記メモの取り方を練習しておくことも大切と思われる。

h) インタビュー（8月10日：インタビュー2日目）

前夜の報告・反省会で、地域住民に対するOHインタ

ビューは、話が発散する傾向にあることが指摘された。そこで2日目は、メイン・インタビュアーがインタビューの進行役、ほかのインタビュアーは質問内容のつっこみ役と、役割分担をおこなった。

i) インタビューの結果整理と記録の保存（終了後すぐ）

録音記録（ICレコーダー）やデジタルカメラの撮影ファイルは、CD-Rに保存した。研究室メンバーによる速記メモも提出してもらった。

なおインタビュー・データを報告書・論文等に使用する際は、データの補充やファクトチェックが必要となる。

j) 学術講演会での発表（11月）

インタビュー成果について、ゼミ1生が日本大学理工学部学術講演会で発表することとした（平成16年11月）。

4. まとめ

a) オーラル・ヒストリー手法とアンケート調査の比較

別稿にも述べるが、フォーマットが決まっているアンケート調査と比較すると、直接、インタビューしながら聞いていくOH手法には、次の利点があげられる。①OH手法では話し手の回答に応じて、あらたな質問をその場でおこなうことができ、深い聞き取りができること、②アンケート調査は回答を想定して質問を作成するのに対し、OH手法では会話のなかから、聞き手の発想にはないあらたな調査・研究課題などを見出しやすい、など。

b) まちづくり調査手法としてのオーラル・ヒストリー

本研究では、初心者の学生が主体となったが、学生はインタビュー成果を発表することで、OH手法や地域について、より理解を深めることができると感じた。彼らは日頃、交通工学・土木工学を勉強しているためか、インタビュー1日目の夜の反省会で、橋やインフラと地域との関わりについて話題になった。インタビュー2日目には、地図を利用しながら、しまなみ海道とグループ活動の関わりなどについて、積極的に質問していた。女性達も、「しまなみ海道やインフラをどう思いますか」と直接的に質問されるよりも、かえって生活に密着した形で、橋の利用やインフラについて回答していた。女性グループの活動について考えるとき、生活環境である瀬戸内海や、そこに架かる橋を抜きに考えることはできないのであろう。

今後は、さらに地域住民を対象としたOHインタビューをおこない、方法論の蓄積を図りたい。

本稿作成にあたり、愛媛県弓削町、鞆の浦の松居秀子氏の協力を得た。謝意を表します。